

四天王寺から紐解く、
遍く救済・再生の物語

弘本由香里
Hiromoto Yukari

歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した『上町台地 今昔タイムズ』。過去との対話を通し、現在を見つめ直し、未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに――よみがえり続ける
四天王寺――

本連載の第1回「災害と福祉に見る“共”の知の継承と文化」、第2回「災禍と祝祭を生きた若き群像とレガシー」の、いずれにも登場する重要なランドマークの一つが、四天王寺〔*1〕だ。

第1回で紹介した、室戸台風（1934年9月21日）による「四天王寺五重塔倒壊の図」（長谷川小信による木版画、

『上方』第46号表紙）は、大災害の衝撃を強烈に訴える。一

流が、聖徳太子の窮民救済の
実践にあるとの共通認識が
脈々と息づいていることにも
驚かされる。さらに、第2回
で触れた、第5回内国勸業博
覧会の開催時（1903年）に
同寺において聖徳太子千三
百年御聖忌に合わせてつくら
れた大釣鐘が、科学万能社会
の到来に警鐘を鳴らすかのよ
うに披露されたエピソード

「*2」も、印象深い。

遡れば、四天王寺は聖徳太子の発願で鎮護国家と万人救済の実践所として、上町台地に創建された日本最初の官寺である。1430年もの長きにわたり、数々の戦火や災害に見舞われながらよみがえり続け、人々の暮らしとともにあり続けてきたのはなぜか。

今回、本連載第3回では「四天王寺から紐解く、遍く救済・再生の物語」をテーマに、『上町台地 今昔タイムズ』

（以下、今昔タイムズ）Vol. 18
「再生の物語を求めて 台地の門前から今に続く語りの世界」〔*3〕（図1）と、同号に係るフォーラムの内容を収録した『上町台地 今昔フォーラム Vol. 18 Document』〔*4〕から、その問いに向き合っていくこととする。

聖徳太子を起点とする思想が、どのように後世にリレーされアレンジされ、四天王寺のイメージが形作られ、社会的・文化的にどのような役割を果たしてきたのか。それは歴史都市・大阪、ひいては都市が包摂しなければならぬものとは何なのか、今に続く問いにもつながる。

受難と再生の物語を支えているもの

失。戦後再建された現在の塔は、鉄筋コンクリート造で、実に八代目に当たる。

五重塔のみならず、中心伽藍や境内の諸堂も満身創痍になりながら、今日までよみがえってきた。受難と再生の物語は、何を糧として生き続けてきたのか。実は、末法思想が広がった平安時代、四天王寺は二代目の塔とともにほとんどの伽藍を焼失する、それまでにない大きな危機に瀕したと考えられている。この出来事が、後に続く四天王寺の在り様を決定づける転機となったという。

上町台地 今昔フオーラム

Vol. 18（以下、フォーラム）で、ゲストスピーカーとして講演いただいた、一本崇之氏（大和文華館学芸部係長、四天王寺特別調査員）は、次のように述べ

おいて太子に語らせる形で取り入れたのだと思います。こうして、四天王寺にとって非常に重要な信仰が生まれて展開していくことになります」

べている。「そうした伽藍焼失から復興していく際に、ただ伽藍を元に戻すだけではなくて、新しい信者や信仰を獲得して、根本的に立て直すことを目指しました。そこで當時、注目されていた浄土信仰を、『四天王寺縁起』*5に

その際、四天王寺が都から熊野等の霊場に至る街道上に位置し、西方に海が広がる台地の上に建っていたことも得難い条件となり、浄土信仰の聖地として身分を問わず人々を引きつけてやまない求心力となった。西門・大鳥居は極

樂の東門と呼ばれるようになり、平安時代末期から中世へ夕陽の向こうに極楽浄土を想念する「日想観」の地となっていく。

社会福祉の実践場としての
DNA

そしてもう一つ重要なことがある。不幸に苛まれた人々が最後にたどり着く場、救済される場としての役割を、同寺が担ってきたことである。

再生の物語を求めて
台地の門前から
今に続く語りの世界

[illegible][illegible][illegible]

熊野

上白河には、名高小唄のこの物語、熊野のついでに
乗舟のりて
はれに付たり
み。また熊野
や熊本とて
スカーパー殿哉

遠く上白河に居るさか又村親しいといふことは、国語でもよく知られてゐたことだ。

『山王』

町台地 今昔タイ
元コードから、綿

[illegible][illegible]

 図1 『上町台地 今昔タイムズ』Vol.18 (2022年 春夏秋冬号) 1面。
左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

図2「一遍聖絵」に描かれた四天王寺。一遍上人は、四天王寺の西大門の前で念仏札を民衆に配り始める(模写本、第二巻、国立国会図書館デジタルコレクションから)。



図3『せつきやう さんせう太夫』挿絵。四天王寺の西門・大鳥居の前で、阿闍梨に会い奇跡的に立ち上がった厨子王（江戸時代の説経正本、1656年、国立国会図書館デジタルコレクションから）。



図4『せつきやう しんとく丸』挿絵。絶望して眠りについた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れた（江戸時代の説経正本、1648年、国立国会図書館デジタルコレクションから）。

ズムを体現していった。この場所性と実践の掛け合わせによって、救済・再生の場としての四天王寺の認知が広がっていたであろうことは想像に難くない。

鎌倉時代、時宗の開祖・一遍上人が衆生済度の念仏札を初めて人々に配ったのも、四天王寺の西大門の前とされる一遍聖絵にもその様子が描かれ、極楽浄土の東門として、遍く人々が救いを求める四天王寺ならではの臨場感が伝わってくる（図2）。

悲哀と救いの語り芸・説経節の舞台に

動乱の時代、四天王寺は、

苦しみの果てを生きる人々が、救いと再起の物語を求めてやまない、無縁平等の広場ともなった。こうした四天王寺特有の場所性は、文化的にも数々の悲哀と救いの物語の重要な舞台となっていく。

典型的なものが、苦難のみぎわから四天王寺を経て、復活する主人公と連れの道行の物語だ。中世末頃に、さらさらを擦りながら語る説経節が現れ、中世末から近世を経て近代へ、能や浄瑠璃・歌舞伎、落語・講釈（講談）・浪花節（浪曲）、さらに小説や戯曲へと受け継がれていく。今昔タイムズVol.18では、それらの源流にある説経節の特徴

を俯瞰し、四天王寺と救済・再生の物語の関係性を紐解いた。

説経節は、仏教の唱導（説経）から派生した、遊芸人による語り芸である。中世末のさらさら説経は、近世には操り説経（浄瑠璃説経）や歌説経へ変化し、寺の境内や路上や小屋で演じられた。漂泊の旅芸人が運んだ救いの物語は、自らを投影し、つらい境遇でもやがて一筋の光が差すことを教え説くもので、「あらいたはしや」と語られる哀話が、人々の心を引きつけ揺さぶった。

代表的な五説経とされるのが「さんせう太夫」「しんと

復活への道行を象徴する場・四天王寺

いくつかの象徴的な場面を眺めてみたい。まずは、「さんせう太夫」から。今も知られる「安寿と厨子王」の物語は、説経「さんせう太夫」が元になっている。姉弟は騙されて人買いの手に落ちるが、厨子王は安寿の犠牲によって奴隷の身から脱する。しかし、容易に再起はならず、流浪し落魄した末に四天王寺にたどり着く。もはや足も立たなくなっていた厨子王だが、四天王寺の西門・大鳥居の前で阿闍梨に会い、奇跡的に立ち上がる。江戸時代の説経正本『せつきやう さんせう太夫』（1656年）の挿絵にも、その様子が人生逆転の重要な場面として描かれている（図3）。そこから再生の道へ、厨子王は大いに出世し、やがて人買いたちに復讐を果たし物語は幕を閉じる。ちなみに、森鷗外の小説『山椒大夫』は、近代的に翻案されており、四天王寺の場面が描かれていない。次に、「しんとく丸」を見

てみよう。河内国高安の長者伝説を元にした説経「しんとく丸」では、主人公は継母の呪いによって宿病に侵され、絶望の淵に陥る。しかし、ここでも、追い詰められたしんとく丸が死に場所として向かった四天王寺が再生の舞台となる。許嫁の乙姫の献身的な愛と観音の霊力によって救われ、最後は父とともに河内に帰ることができる。江戸時代の説経正本『せつきやう しんとく丸』（1648年）の挿絵には、四天王寺にたどり着き絶望して眠りについた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れ、闇の世界から光の世界へ、運命の転換点となる場面が描かれている（図4）。

最後に、「小栗判官」から、熊野街道と四天王寺の関係に注目したい。小栗判官は妻・照手姫の家族に殺され地獄に落ちるが、閻魔大王の計らいで餓鬼阿弥となってこの世に戻ってくる。醜い姿で「この者を熊野本宮に連れて行ってやるように」との札を下げ、土車に乗せられて人々に引かれ、相模国の遊行寺から、都

を経てはるばる熊野を目指し、苦難の道行を成就して復活を遂げる。

江戸時代初期に描かれた「小栗判官絵巻」（伝岩佐又兵衛、皇居三の丸尚蔵館蔵）では、四天王寺の西門・大鳥居の前を、土車に乗せられ数名に引かれて進む餓鬼阿弥の姿が描かれている（図5）。絵巻では、この後住吉大社の前を通る場面もある。熊野街道は、別名・小栗街道とも呼ばれ、その由来となったのがこの物語だ。

浄土信仰の聖地である四天王寺はこの街道上にあり、救済の霊場・熊野に向かう際の重要な経由地の一つに位置付けられていることが見て取れる。

おわりに ―都市の拠り所であること―

長い歴史の中で、激しい社会の動乱、度重なる災禍に、四天王寺がいかに向き合ってきたのか。今昔タイムズVol.18と同フォーラムの記録をもとに、一本氏による『四天王寺縁起』の読み解きを手掛かりとしながら、救

済・再生の物語に着目し、その背景を見つめてきた。

聖徳太子の発願に遡る精神と実践が、浄土信仰・日想観の聖地へと発展的に接続され、万民救済の実践場たる四箇院のビジョンが再定義され、時代の変化に堪え、遍く人々の拠り所となるダイナミズムを涵養してきたのだろう。

四天王寺には、弘法大師・空海、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞、時宗の一遍をはじめ、さまざまな宗派の開祖が訪ね事蹟を残している。特定の宗派に偏らない、越境的・超越的な包容力を歴史的に宿していることもまた注目すべき特徴の一つである。

都市の拠り所とは何か、どうあるべきか。社会の格差や分断が進み、まさに救済・再生の物語が必要とされている今、四天王寺が体現してきた包摂性、遍く人々を中心に据えた、伝統と革新の接続の知恵は、1430年の時を越えて示唆に富む。



図5 江戸時代初期に描かれた「小栗判官絵巻」では、餓鬼阿弥となって土車に乗せられた小栗判官が人々に引かれて四天王寺の門前を通る（伝岩佐又兵衛、第13巻第24段天王寺、皇居三の丸尚蔵館蔵）。

注

- *1 四天王寺は大阪市天王寺区にある、聖徳太子建立の寺。天台宗に属していた時期もあったが、第二次世界大戦後すぐに独立し、全仏教的な聖徳太子の精神を重んじ和宗総本山となった。
- *2 「四天王寺大鐘銘」は、戦時体制下の1942年に解体・金属供出され、失われた。大鐘楼は現在の英霊堂で、大阪市指定文化財。
- *3 「上町台地 今昔タイムズ」のバックナンバーは、大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。なお、Vol.18の参考文献は同紙の1面下に記載。https://www.og-el.jp/project/ucoro/event2_kon.html
- *4 「上町台地 今昔フォーラム Document」のバックナンバーは、今昔タイムズと同じホームページで公開している。また、同Document Vol.18に収録した、一本崇之氏の講演録「四天王寺という場―説経節や絵巻にみる救済・復活・再生の物語とその背景―」は、同氏の著書『四天王寺新縁起』（東方出版、2025年4月）に掲載（一部改訂）されている。
- *5 国宝『四天王寺縁起』（根本本）は、1007年に発見された一巻の巻物で、奥書に「推古3（595）年に聖徳太子がこの縁起を書き留め、金堂の中に納め置く」とあるが、現在の研究では、見つかった平安時代に作られたものとされている。
- ひろもと・ゆかり 大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所研究員。住宅建築専門誌「新住宅」編集員等を経て、1992年から大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所（CEL）研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』『地域を活かすためのデザイン―大阪・上町台地の現場から』（ともに創元社）、共編著に『コミュニティ・デザイン新編』（さいはて社）など。